イヨマンテ

佐賀　彩美（さが　あやみ）
一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

アイヌ民族のお祭りのなかで最も有名なのは、イヨマンテ（熊送り）です。簡単に言うと、春の熊猟で授かった子熊を１～２年育て、その魂を親の待つ神の国に送り、熊が再生して下界へ降臨するための重要な儀礼です。アイヌ語の逐語訳は、i（それを）y（母音が重なるため入る）oman（行か）te（せる）となります。それとは子熊の霊魂のことで、行くべき場所は「神の国」であり、この言葉は養育した子熊の送りにしか使われません。アイヌの人々は、前年の晩秋から熊がどこに冬眠用の巣穴を作るかを注意深く観察し、翌年２月か３月頃巣穴で母熊を捕獲、冬眠中に出産した子熊を自宅へ連れ帰りイヨマンテのために養育します。興味深いのは、母熊が、自身や子熊を授けるべき人間を選ぶと考えられていることです。例えば、熊が、射当てた人以外の、猟に深く関わりもしない他の人に向かって倒れると、母熊がその人に子熊を授け、養育を託したということになります。子熊の養育を託されるためには色々条件があり、家に不幸があった人や病気持ち、妻が怠け者（子熊の世話が行き届かない）、根性の悪い人などは適性に欠けるため選ばれず、猟にも同行させてもらえませんでした。一方、神の指名により子熊を託されるのは非常な名誉と考えられ、その噂は近隣の村々に伝えられ、後世にまで語り継がれるほどでした。授かった子熊は、それは大切に育てられました。幼少期は常に人の懐に入れて体温低下を防ぎ、人間の母乳を与え、歯が生えれば離乳食、成長すると、家族が食事をする前に、その日調理した飯や粥、汁物、惣菜を腹一杯食べさせ、残りを家族が食べます。子熊の食事は、一番美味しく、栄養があり、魚なら小骨も取ってという丁寧さでした。ある程度大きくなると屋内での養育が難しくなるので、専用の寝床（檻）を造って移し、アイヌ社会では名誉職とされる飼育係に任命された少年が世話もしました。新居（檻）に入っても、子熊は天気が良ければ外に出され、子供達と一緒に遊びます。それは、足柄山の金太郎の童話にあるような光景でした。このように大切に育てられた熊もいつかは神々の世界へと送られます。これは村や地域の人々が総出で行う大掛かりな行事で、沢山のイナウ、供物、様々な歌舞音曲が奉納され、荘厳な祈り言葉のお土産が供えられます。神の世界に戻った子熊は、両親や身内親戚を招聘し、大宴会を催し、そこに集まった列座の神々に、供物で盛大に送ってもらったこと、人々の祈りや謝辞などを細かに報告します。招聘された各熊神は、帰りには沢山のお土産を貰い、是非一度は賓客になろうと、進んで肉と毛皮を携えて人間の世界に再生して訪れるものと考えられています。熊は現象的には殺されますが、これは肉体と霊魂とを分離する極めて大切な儀礼で、人も熊も身体は死んでも魂は不滅で蘇生し続けるというアイヌ民族の考えでは決して残酷ではなく、その重要さは、一歩でも間違えば人が死をもって贖わなければならないとされるほどでした。

平成30年度は、全道で900頭以上の熊が捕獲されました。送りの儀式をしてもらえなかったこの熊達は、何のお土産も持たずに神の国に帰ったため、肩身の狭い思いをしていることになります。人的、物的負担は大きいですが、衣装、踊り、供物、儀礼、アイヌ語の祈りの言葉まで、アイヌ文化の全てを含む総合芸術、集約された文化の真髄ともいえるイヨマンテを、ぜひ復活させていただきたいと願っています。

＊本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村　久和　氏　北海学園大学名誉教授　北日本文化研究所代表　アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部（滝川市）で開催のベカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート⑹,⑺』（北海道教育委員会、2007 , 2008年）、『平成20～29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査１～９』（北海道教育委員会、2008～2017年）等。